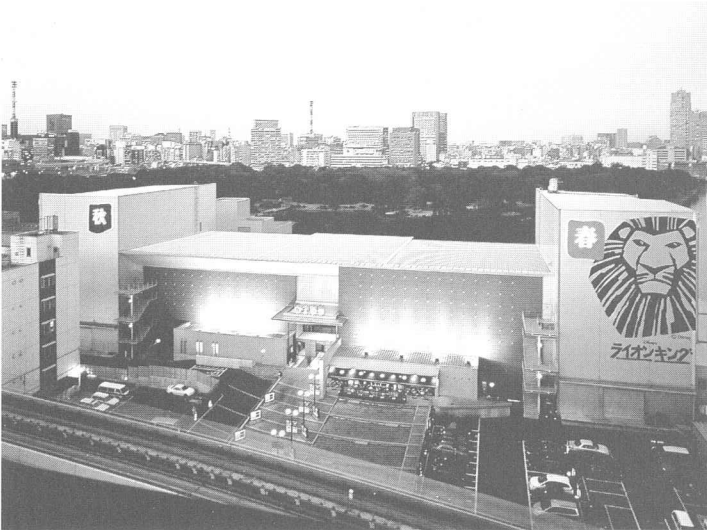


JR東日本アートセンター

四季劇場「春」「秋」



フランス演劇や日本の作家による意欲的な戯曲作品の上演などで、日本演劇界のなかでも独自の歴史を築いてきた劇団四季は、近年ロイドウェーバーやブロードウェイのミュージカル作品を積極的に上演し、舞台作品の醍醐味と楽しさを広める一方、ロングランシステムの実現を果たすなど、日本の演劇文化の変革に大きな役割を果たしてきました。さらに、「文化の地方分権」をテーマに、各地で展開された仮設劇場による作品の上演は、劇場建築の在り方についても貴重な指針を与え、そこで培われてきたさまざまなノウハウが新しい常設劇場の誕生として結実しています。舞台と観客席の緊密感を重視した設計。余分な装飾を省き、作品が必要とすることを100%実現できるように機能的、効率的に考えられた劇場設備や機構。そこには、最高の舞台作品を観客に提供していくための絶え間ない意欲を伺うことができます。こうした先進の試みに応えるために、MARUMOは最新の舞台照明技術を提供していきます。

春劇場

竣工年月=1998年9月
所在地=東京都港区海岸1丁目10
収容人員=1255名
舞台間口=12.8m
奥行=19.8m
高さ=9.5m
すのこ高=24.0m

秋劇場

竣工年月=1998年9月
所在地=東京都港区海岸1丁目10
収容人員=907名
舞台間口=10.8m
奥行=18.0m
高さ=9.5m
すのこ高=24.0m

赤坂ミュージカル劇場

1999年8月閉館
所在地=東京都港区赤坂5-3-6
収容人員=1232名(車椅子スペース4台分)
舞台間口=18.0m
奥行=16.5m
高さ=9.4m
すのこ高=21.6m

大阪MBS劇場

竣工年月=1999年2月
所在地=大阪市中央区城見1丁目3番地2号(大阪ビジネスパーク内)
収容人員=1100名(車椅子スペース4台分)
舞台間口=12.6m
奥行=18.5m
高さ=9.6m
すのこ高=24.0m

新名古屋ミュージカル劇場

竣工年月=1999年5月
所在地=名古屋市中区栄1丁目
収容人員=1050名
舞台間口=12.6m
奥行=18.0m
高さ=9.6m
すのこ高=23.0m

福岡シティ劇場

竣工年月=1996年5月
所在地=福岡市博多区住吉1丁目2-1
収容人員=1144名(車椅子スペース6台分)
舞台間口=14.4m
奥行=17.0m
高さ=9.0m
すのこ高=16.2m

JR東日本アートセンター 四季劇場「春」



東京・浜松町に開場した四季劇場「春」では、海外ミュージカルのロングラン公演がおこなわれます。こけら落としとして上演されているディズニー製作の『ライオンキング』は、前衛演出家のジュリー・ティモアが東洋の演劇手法を大胆に取り入れた話題の作品。日本の演劇界にロングランシステムを定着させた劇団四季にとって、「春」劇場はこのシステムの可能性をさらに追求していく中心的な劇場として、魅力的な作品を提供していきます。

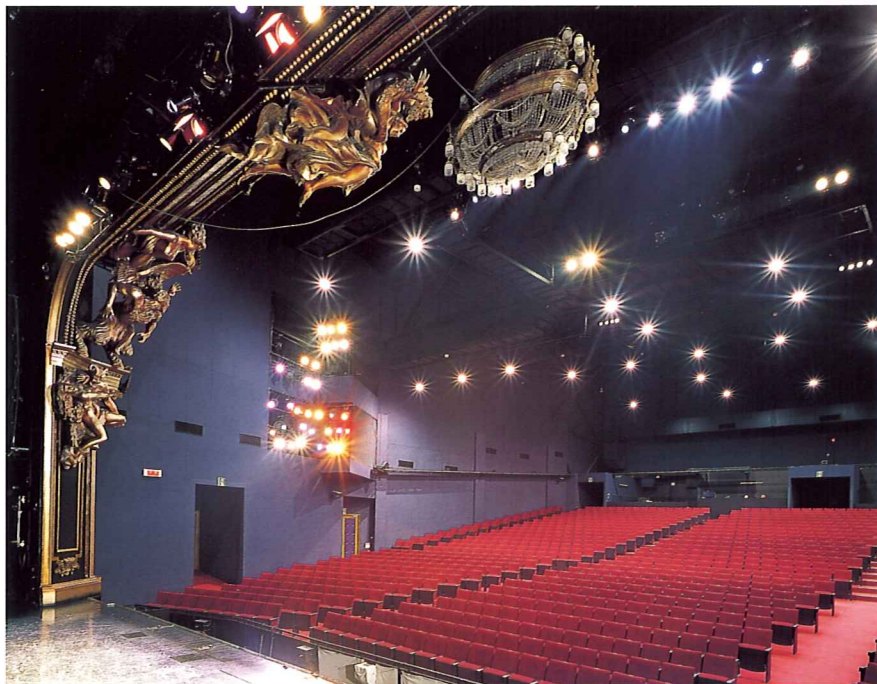
JR東日本アートセンター 四季劇場「秋」



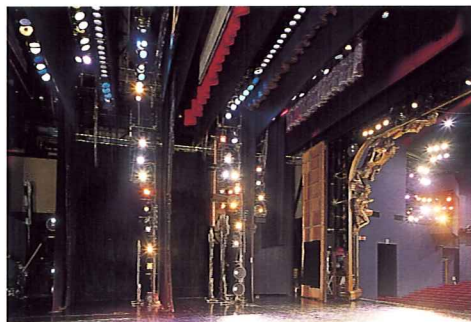
「春」劇場と隣合わせた四季劇場「秋」では、劇団四季の貴重なレパートリー作品を中心に上演プログラムが組まれています。『ジーザス・クライスト=スパー・スター』や『アスペクト・オブ・ラブ』といったミュージカル作品をはじめ、ジャン・アヌイやジャン・ジロドゥなどのフランス演劇、さらには日本の演劇史の中でも高い評価を得ている武田泰淳や加藤道夫の戯曲作品など、劇団四季の原点ともいえるストレートプレイが上演されていきます。



赤坂ミュージカル劇場

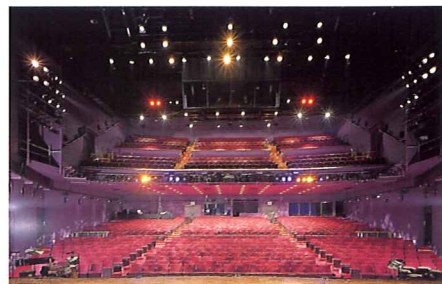
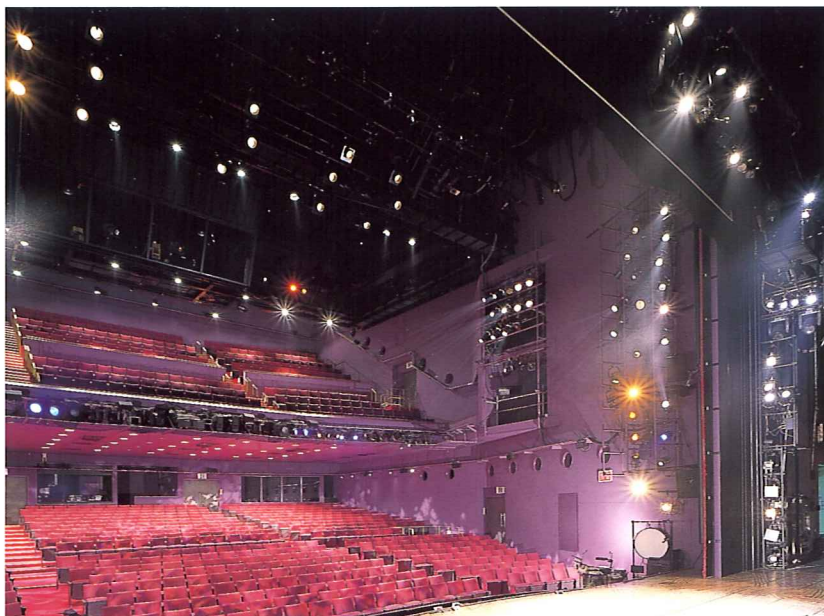


「赤坂ミュージカル劇場」は、1995年11月にディズニーとの提携作品『美女と野獣』を上演するための仮設劇場としてオープンしました。1983年、東京・西新宿に初めての仮設劇場「キャッツシアター」を誕生させ、『キャッツ』のロングラン公演を実現し、大阪、名古屋、福岡、札幌などでも仮設劇場でのミュージカルのロングラン公演を展開してきた劇団四季の舞台づくりを継承・発展させながら、この劇場では『美女と野獣』をロードウェイと全く同じ規模で上演するために、フライタワーの高さや奈落の深さなどの規模の拡大が計られました。「赤坂ミュージカル劇場」は、『美女と野獣』の公演の後、『オペラ座の怪人』を上演し、1999年8月に閉館しましたが、ここで蓄積された貴重なノウハウは、四季劇場「春」「秋」や、大阪、名古屋、福岡での常設劇場の建設に生かされています。

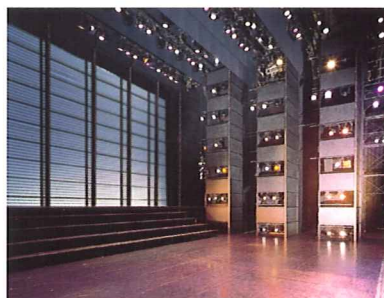


大阪MBS劇場

「大阪MBS劇場」は、『オペラ座の怪人』や『美女と野獣』を上演し、1998年9月に閉館した「MBS劇場」の後を受けて、新たに建設された劇団四季のミュージカル専用劇場です。数々の常設・仮設の劇場づくりで培ったノウハウが随所に生かされた劇場では、『ライオンキング』のロングラン公演がスタートし、斬新な表現で舞台の醍醐味と楽しさを提供しています。



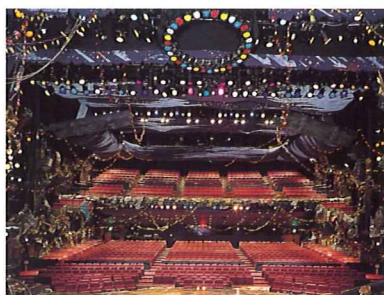
新名古屋ミュージカル劇場



名古屋市中区に建設された「新名古屋ミュージカル劇場」は、劇団四季にとって東海地方初の本格的な常設劇場です。1997年3月から仮設劇場の「名古屋ミュージカル劇場」の舞台を通して、『オペラ座の怪人』や『美女と野獣』などのミュージカル作品を提供し、数多くの観客を動員してきた実績と、名古屋の演劇文化の活性化を促す意欲が、この新しい常設劇場の誕生につながりました。ここでは『キャッツ』のロングラン公演がおこなわれています。

福岡シティ劇場

「福岡シティ劇場」は、劇団四季にとって初めての常設の専用劇場として、また本格的なロングランシステムで運営される日本で初めての常設劇場として、複合商業施設「キャナルシティ博多」の中に誕生しました。『キャッツ』の福岡公演で、多くの観客を魅了した劇団四季の舞台は、福岡都市部の再開発事業と歩調を合わせながら、九州の演劇文化を育み、文化の地方分権を実現するために、新しい劇場を中心に、数々の作品を提供していきます。



作品が求める機構と設備を実現する劇場

—劇団四季の新しい劇場—

劇団四季照明部チーフディレクター

飯塚 登

東京・浜松町にオープンした四季劇場「春」と「秋」の二つの劇場、また東京・赤坂の「赤坂ミュージカル劇場」、「大阪MBS劇場」、「新名古屋ミュージカル劇場」、「福岡シティ劇場」と、主要都市に誕生した劇団四季の劇場で、現在公演がおこなわれています。

これらの新しい劇場の設計にあたっては、劇団四季がこれまで蓄積したノウハウが随所に生かされていますが、その特徴を一言でいうと、固定した設備は何もなく、上演する作品に最も適した条件を、その都度つくることができる柔軟な機構と機能を備えた劇場と言えるでしょう。

また、観客にとっては、舞台が間近に見えるように観客席が設計されているため、舞台と一体感を感じながら、迫力のある演技を楽しむことができる点も特筆される劇場と言えます。

舞台照明設備についても基本的には設備は何もありません。ただ、電源が多くとってあるだけです。

四季劇場「春」「秋」の各々の劇場には1000kVAの電源が設備されていますが、普通の演劇を上演するだけではこれほどの電源は必要ありません。しかし、ミュージカル作品の上演などでは電気容量が必要になります。必要に応じて電気容量を増やすということはできないので、いつでもどんな規模の作品でもすぐに対応できるように電気容量が用意されているのです。そして、電源盤は照明ユニットをどこにでも設置できるように、ギャラリーや奈落、フロント、シーリングなどいろいろな場所に設備されています。この多様な作品に対する対応性と機動性が大きな特徴の一つと言えます。

劇場機構としても90本の空バトンが設備されているだけです。これらのバトンは15cm間隔のピッチで設備されているので、スポットライトなども明かりの欲しい位置に自由に吊ることができます。

また、これらのバトンは基本的に全て手動バトンですが、公演の内容によって簡単に電動バトンに変えることができるシステムになっています。たとえば、『オペラ座の怪人』を上演していた「赤坂ミュージカル劇場」のバトンも手動バトンでしたが、公演スタッフの人数を減らして効率的に上演ができるように、23本を電動バトンに変えていました。

手動バトンを必要に応じて電動方式に変えるということは、劇場設計の段階から考えられていることです。たとえば、一見すると新しい劇場はギャラリ

ーのスペースが広すぎるように見えます。しかし、これはバトンを電動にする時にモーターを設置するための場所として考えられているからです。重量のあるモーターを1本のバトンにつき1台設置することを考えると、これに対応するギャラリーの広さと重量に耐える構造が必要とされます。どのような作品にも対応できるような機構と設備を備えた劇場というのは、実は綿密な設計の基に考えられているのです。

このような作品に合わせて劇場の設備や機構を柔軟に対応させるというコンセプトは、15年前に東京・新宿の仮設のテント劇場で『キャッツ』を上演した時を原点にして生まれたものです。以来、さまざまなお客で何度も『キャッツ』を上演してきましたが、再演のたびに前回の公演の時の経験を反映させて、仮設劇場の設備の面でも、上演態勢の面でも、少しずつ改善していくという姿勢で取り組んできました。もちろん、舞台表現の面でも必ずグレードアップさせてきました。明かりについても、照明デザイナーの沢田祐二氏が表現の可能性をさぐりながら少しずつバージョンアップさせてつくられてきました。

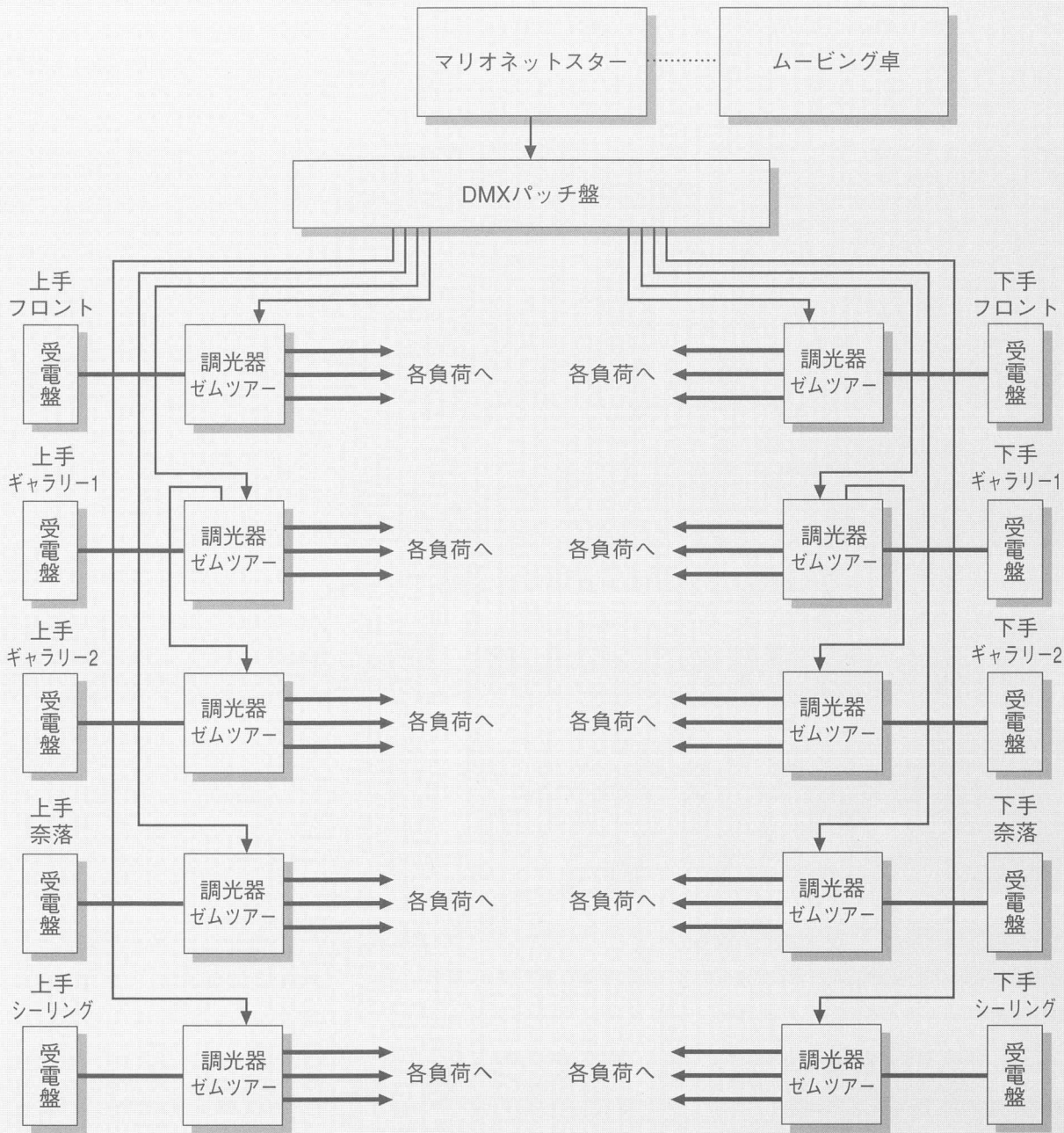
こうした永年にわたる経験と意欲的な姿勢が現在の四季の劇場に結実されているのです。また、こうした考え方や方法論は、外国の作品を上演するなかで培われたものだとも言えます。

海外の作品を上演する場合、海外の照明家のデザインを同じようにつくることになりますので、具体的に明かりをつくっていく上での方法論や、考え方の違いなどについて、何度も打ち合わせがおこなわれます。特に、システムや機材の違いなどもあり、照明家や演出家の要求に応じていくためにはさまざまな苦勞があります。しかし、そうした仕事が新たな器具の開発に結びついたり、それまで使っていたシステムで新しい使い方を発見したりと学ぶこともたくさんあります。

私たち照明家は常に最高の状態で、舞台を観客に提供していきたいと考えています。どのような劇場でも同じように作品をみせていくというのが照明家の使命だと思っています。

劇団四季の劇場の設計思想である、どんな作品にも対応できる劇場をつくるということは、私たち照明家にとって、こうした使命の実現に一步一步近づいていくことなのです。

基本的な舞台照明システム構成



- 受電盤と調光器を劇場内の各負荷回路近傍に配備してあります。
- 受電盤には直分岐回路も内蔵されており、調光回路以外の電源取り口としても使用することができるため、汎用機材の仕込みにも対応できるようになっています。
- 調光器が負荷回路近傍に設置されているため、調光機械室を設ける必要がありません。また、各負荷回路への配線やコンセントダクトも削減することが可能です。
- DMXパッチ盤からは、各負荷回路近傍に配備したD

MX-512調光信号用コネクタおよびムービング信号用コネクタへ自在に信号を送ることが可能になっています。これによって、信号線の引き回しを整理、また削減しやすくしています。

- カラーチェンジャーおよびムービングスポット用操作卓は、調光卓とは別に設置されているため仕込の時の分散作業が可能になっています。公演時は、調光卓からのキューNo.リンク信号により自動再生を可能にしています。